

東京2020大会を見据えて

第6回 「寺尾姉妹」事件

— 性的視線にさらされる
女性アスリートたち



寺尾姉妹(左:文、右:正)

田中 ひかる

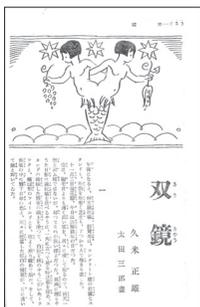
女性アスリートは、男性アスリートよりもはるかに容姿やプライベートなど、競技と関係ない面が取り沙汰される。競技中、胸部や股間を狙ってシャッターを切り、雑誌やウェブメディアに提供するカメラマンもいるため、集中力を欠いてしまうという女性アスリートもいる。あくまで真剣に競技に取り組んでいる彼女たちが、性的に消費されているのである。

こうした傾向は、日本で女子スポーツが勃興した頃からすでに見られた。一時は人見絹枝の

ライバルとも言われた、双子のスプリンター「寺尾姉妹」が最初の犠牲者と言えよう。

東京府立第一高等女学校の学生だった寺尾正(きみ)は五〇メートル走、寺尾文(ふみ)は百米メートル走を得意とするスプリンターで、文は世界記録が十二秒四だった当時、十二秒七の記録をもっていた。姉妹は記録だけでなく美貌でも世間の注目を集め、プロマイドが発売されるほどの人気だった。

一九二七年の第四回明治神宮競技大会の短距離走で、絹枝が



「双鏡」が連載された「婦人倶楽部」(左)と初回誌面(右)

姉妹を抜いて一位でゴールすると、姉妹を一目見ようと望遠鏡を携えて集まった男性たちは、絹枝にひどい罵声を浴びせた。それでも絹枝は、二人のスプリンターの登場をうれしく感じ、もう一人有能な選手を加えて四人でチームをつくり、翌年のアムステルダムオリンピックのレーン競技に出場したいと考えた。しかし姉妹は、絹枝と走ったこの大会を最後に引退してしまふ。

作家の久米正雄が、姉妹をモデルとした「双鏡」という愛欲小説を「婦人倶楽部」に連載したためである。ほぼフィクションのスキャンダラスな内容に、姉妹の両親が抗議した結果、連載は中止されたが、このようなことが続けば将来の縁談に差し支えると判断した母親は、姉妹に競技生活からの引退を命じた。「寺尾姉妹」事件から九〇年。女性アスリートたちは相変わらず性的視線にさらされている。その背景にあるのは、女性アスリートに対するリスベクトの欠如だろう。

たなかひかる：コラムニスト。歴史社会学者。生理用品連絡協議会共同代表。横浜国立大学大学院博士課程修了、博士号を取得。時代に翻弄される女性の研究を続ける。現在は1928年アムステルダムオリンピックに唯一の日本人女性として出場した人見絹枝について執筆中。著書に『生理用品の社会史 タブーから一大ビジネスへ』ほか。『「毒婦」和歌山カレー事件20年目の真実』を2018年7月に発刊。